外来精神医療の社会学
―〈メンタルクリニック〉の興隆と求められる治療―

櫛原克哉[1 2]

[1] 東京通信大学情報マネジメント学部　[2] 慶應義塾大学論理と感性のグローバル研究センター

ABSTRACT

精神科や心療内科などの診療所に受診した経験を持つ人々を対象としたインタビュー調査の結果について検討した。1990年代以降、都市部を中心に「メンタルクリニック」などの呼称を持つ医療機関が増加するにつれて、いわゆる従来の「精神病院」における治療とは性質を異にする受療行動や治療観が現れつつある。医師の診断や指示のもとで服薬や精神療法を継続する人々がいる一方で、精神医学的な独自の自己診断や医師に対する処方内容の要望、服薬の拒否といった行動を示す人々もみられた。

しかし、このような患者の能動性は、精神医学という専門知に対する離反を必ずしも意味しない。操作的カテゴリーによる自己診断が比較的容易な診断基準によって、人々は自身の苦悩を「治療対象」として説明することが可能になり、その「正しさ」の背景には学問的権威としての精神医学が位置づけられる。また、人々は「精神病院」のような場所の〈特殊性〉を、メンタルクリニックにも投影することがあるため、そこでの〈特殊〉な治療に対する期待も残存する。これらの現象は「不安定な医療化」とも呼べるものであり、それは一般社会に浸透した過剰診断などの精神医学批判のほか、民間療法や他の心理学的な説明との競合のもとで展開するものである。メンタルクリニックは、物理的かつ心理的にも身近となった精神医療であるといえるが、そこで期待される「治療」と実際に提供される「治療」との間に落差も生じやすい。さらに、この落差を埋めることを謳う療法や心理学も介在しやすい。「心の病」をめぐる抜き差しならない「治療」の網の目の中で、精神科診療所の出入りを繰り返したり、“真の”治療を求めざるをえない人々が現れているいえる。